

| | | | | | | | | | | | | | | |
|--|--|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 実施体制の整備 | a2. 拠点校および連携校における WWL 事業推進のための体制整備 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | a3. 拠点校内に WWL 推進体制を置くことへの支援 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | a4. 関係各機関との調整 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | b. 情報共有体制の確立 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | c. 法人担当部長および拠点校校長の役割 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | d1 .WWL 運営指導委員会 | | | | | | | | ○ | | | ○ | | |
| | d2. WWL 検証委員会 | | | | | | | | | | ○ | ○ | | |
| | e. 卒業生の卒業後の進路追跡について | | | | | | | | | | | ○ | ○ | |
| | f. 留学生支援 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | g. 本事業により授業改善や教職員及び生徒の意識改革を促した状況 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| h. アジア高校生架け橋プロジェクト | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 財政等支援 | a. WWL 事業推進のための教職員加配 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | b1. WWL 事業推進に向けた教員研修の実施と高大接続の強化 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | b2. 教員海外派遣研修・立命館大学教職大学院派遣 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | b3. 海外日本人学校への教員派遣 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | c. 継続的実施のための計画 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| ALネットワークの形成 | a. AL ネットワーク事務局会議及び AL ネットワーク推進会議 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | b. AL ネットワーク情報共有体制と共同事業の開発 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | c1. 海外大学進学希望者支援・啓蒙 | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| | c2. 海外提携大学を活用した高校生留学プログラム、特にギャップイヤー留学の実施 | ○ | | | | | | | | | | | ○ | ○ |
| | c3. 英語トップアッププログラムの実施 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| | d. 事務局体制及びカリキュラム開発の人材配置 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | e1. 高校生国際会議の開催状況 | | | | | | | | | | ○ | | | ○ |
| | e2. 高校生国際会議の準備状況 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | f1. WWL 成果普及支援 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | f2. 成果発表研究会の開催、全国高校生フォーラムへの支援ならびに参画 | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| g. 海外大学、海外中高、グローバル企業、研究機関などさまざまな提携先の紹介 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書 | 作成済み、随時締結実施 | | | | | | | | | | | | | |

(2) 実績の説明

学校法人立命館の一貫教育部や部内の教育研究・研修センターおよび総合企画部国際連携課、広報課、立命館大学国際部、キャリアセンター、立命館アジア太平洋大学（APU）との連携や協力のもと、以下の項目に取り組んだ。

【実施体制の整備】

a1. AL ネットワーク構築・整備のための管理機関における体制整備

法人内の附属校統括部門である一貫教育部に、カリキュラムアドバイザーと海外交流アドバイザーを配置することとしている。カリキュラムアドバイザーは、WWL 事業の法人内責任者としての部付部長が担当したが、海外交流アドバイザーは、新型コロナウイルス感染拡大防止のための制限等も考慮し、また当該の部付部長が海外交流にも精通していることもあり、本年度に限り、担当者をもう 1 名置くのではなく、兼任することとした。次年度に関しては、2 人体制に戻すことにしている。

a2. 拠点校および連携校における WWL 事業推進のための体制整備

拠点校の教員定数について、WWL 推進のために 2 名の教員加配を継続した。次年度以降も、教員定数に国際化推進のための加配を継続する予定。法人内の連携校においては、3 校がスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受けているが、同時に、SGH 校であった 2 校には、指定終了後も国際化推進のための教員定数の加配および支援体制構築を行っている。

a3. 拠点校内に WWL 推進体制を置くことへの支援

立命館宇治高等学校においては、WWL 事務局会議を各校内の分掌が連携する機関として設け、担当副校長を置いた。校長をはじめ担当副校長が率先して、この会議を通して情報共有を図るとともに、全体と協力して WWL 拠点校として AL ネットワーク構築を進めた。また、毎週の事務局会議には、立命館一貫教育部からも担当部長であるカリキュラムアドバイザーと海外交流アドバイザーが参加し、支援を行った。

a4. 関係各機関との調整

学校法人立命館一貫教育部が主管となり、文部科学省や大学、外部団体への問い合わせや相談をはじめ、さまざまな折衝・調整を行った。

b. 情報共有体制の確立

AL ネットワーク専用のメーリングリスト (連携 ML) 、法人及び拠点校担当者間のメーリングリスト (事務局 ML) を設定、管理しており、様々な募集、報告、連絡に活用されている。特に、AL ネットワーク全体の ML ではすでに 190 通もの情報が連携 ML 上で共有されている。また、Facebook 上に AL ネットワークのグループページを作り、各校が情報をアップロードして共有できる仕組みを作り、グループメンバーも 60 を超え、通算で 200 件近い情報が共有されている。

c. 法人担当部長および拠点校校長の役割

いずれも、毎週の事務局会議に出席し、全体の進行を把握、管理した。

適宜、法人のリソースの紹介、人材育成のための研修等を行った。

また、新規の連携校や企業、団体には、法人の担当部長や拠点校校長あるいは副校長がオンラインではあったが、AL ネットワークへの参加を依頼した。

d1. WWL 運営指導委員会

<構成> 一貫教育部および立命館宇治高等学校を事務局とし、以下の委員 (敬称略・順不同) に継続いただいた。

二宮 皓 広島大学名誉教授

飯吉 透 京都大学 理事補 (教育担当) ・高等教育研究開発推進センター長・教授
兼任：大学院教育学研究科教授 (高等教育開発論講座)

神居文彰 平等院 住職

川上全龍 妙心寺塔頭春光院副住職 慶応大学研究員

The Fellow of the U.S.-Japan Leadership Program by the U.S.-Japan Foundation

小関道幸 株式会社ソーシャルプロデューサー代表取締役会長

浮田恭子 宝塚大学看護学部准教授、元立命館小学校校長、元立命館宇治高等学校副校長

村井尚子* 京都女子大学准教授

山下真司* リクルートキャリアガイダンス編集長

大森順子* 大阪大学大学院大学院生、元百合学院進路指導部長

小村俊平* OECD 日本イノベーション教育ネットワーク事務局長

<内容> 実施状況報告・効果検証・今後の計画へのアドバイス等

今年度は、10 月と 1 月に、オンラインではあったが、2 回の実施をし、貴重なご指導・ご助言をいただいた。特に、オンラインであったからこそ、参加率が高く、また意欲的なご助言もいただき、コロナ禍を機会として新しい考え方を持つことの重要性をご指摘いただいた。

また、上記*の委員の方には、上記の他に、質問紙開発やカリキュラム開発等について別途個別の指導助言をいただいた。

d2. WWL 検証委員会

<構成> 一貫教育部および立命館宇治高等学校を事務局とし、以下の委員 (敬称略・順不同)

に継続してご指導・ご助言をいただいた。

花田真吾 東洋大学国際学部グローバル・イノベーション学科准教授

影戸 誠 日本教育工学会国際担当理事，同国際交流委員長，日本福祉大学（客員教授）

河井 亨 立命館大学スポーツ健康科学部准教授

<内容>

検証を進めるための指標等の検討と生徒アンケート実施，その際の分析方法，卒業生の追跡方法等に関するアドバイスをいただいた。今年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止の観点もあり，委員会としての開催は行わなかったが，個別ご助言をいただいた。また，特に，2月には，下記のビデオクリップを活用した「成長アセスメントプロジェクト」の報告会を行い，検証委員の先生のご指導のもと大学生や大学院生による分析を共有し，高校生を指導してきた教員にとって非常に参考になった。

<検証委員会アドバイスによるビデオクリップ作成>

昨年度は新型コロナウイルス流行による休校措置等により十分には実施できなかった高校生各自の Learning History をビデオクリップにする取組みを，今年度は実施できた。これは，アセスメントを行うに際して，分析が正確にできるようにするためである。評価別にアーカイブし，アセスメント前に見れば，評価軸が固まり，正確なアセスメントができるのではないかとこのアドバイスによるものであった。今年度は，前述のように，外部からのアセスメントの報告会も実施できた。また，これらを生徒へ教材とすることも検討している。

e. 卒業生の卒業後の進路追跡について

拠点校における社会に出て以降の卒業生の追跡調査は，学校同窓会との連携課題としては，継続課題としたい。ただ，19年間のSSHの実績がある立命館高等学校において実施されたこの間の大学卒業後にイノベティブなグローバル人材として世界各地で活躍している卒業生へのインタビューを彼らのストーリーとして冊子にまとめた取組みが，文部科学省の人材政策課が中心になって全国版を作成され，公開された。同様の取組みを広げたいと考えている。

f. 留学生支援

拠点校においては，国際センター内に日本語教員を配置。生徒組織国際委員会による留学生をケアできる体制を作っている。寮においても，留学生サポートのために英語のできる教員を定期的に派遣し，留学生の状況把握，学習サポートに努めている。ただ，今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急措置により留学生受入は「アジア高校生架け橋プロジェクト」による受入以外はすべてキャンセルとなった。アジア高校生架け橋プロジェクトは，11月より受け入れている。

g. 本事業により授業改善や教職員及び生徒の意識改革を促した状況

拠点校においては，今年度が「コア探究」が高校3年生まで実施される完成年度であった。各学年の全担任がこの科目を担当することにより，探究的学習の進め方への見識が広がり，各教科においても実践が進められるようになってきた。特筆すべき点は，学年の教科担当教員が「なぜ学ぶのか」を語るにより，教科教育にも影響を与え，カリキュラムマネジメントの考え方が広がったことである。

全国高校生 SR サミット参加の企業メンターから，高校生の力を再認識し，社会全体で教育を進める重要性に気が付いたという感想を多くいただいた。このことが，企業や団体のALネットワークへの加入，協力を促し，教員が社会とのつながりの重要性に気付く好循環となった。

また，オンラインではあったが，1月22日・23日の両日にわたりWWL研究報告会を実施し，10月27日にはコア探究にテーマをしぼった公開研究会も実施し，多くの参加者を得て，拠点校の教職員の授業改善や意識改革を図るだけでなく，広く全国に輪を広げた。

h. アジア高校生架け橋プロジェクト

立命館宇治高等学校では，11月より3月まで，トルコ，マレーシア，インドネシア，インドから各1名，合計4名を受け入れた。全国高校生フォーラムへの参加，1月のWWL研究報告会での発表など，本校生徒の学びに大きな役割を演じてくれた。

立命館高等学校ではタイ王国とカンボジアから各1名，合計2名を，立命館慶祥高等学校でもインドネシアとインドから各1名合計2名を受け入れた。

【財政等支援】

a. WWL 事業推進のための教職員加配

拠点校の教員定数について、WWL 推進体制に留意し国際化推進のための2名の教員加配を継続した。次年度以降も、教員定数に国際化推進のための加配を継続する予定である。

b1. WWL 事業推進に向けた教員研修の実施と高大接続の強化

立命館一貫教育部に置いた「附属校教育研究・研修センター」の主催で、新任研修（年間9回）や教科別研修、ミドルリーダー研修などを幅広く実施し、優れた教育実践や理論から学ぶ機会を継続して提供してきた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のための措置によりオンラインでの実施となるが多かったが、反対に、教員は、これらの機会を通して、オンラインでの授業方法に関する見識を深め、ICTを活用したアクティブ・ラーニングやPBL型授業等について知識を深めることができた。

また、立命館大学の教育学部や各学部と連携し、特に課題研究の推進のために大学教員が相談に乗ったり、研究成果発表会に大学の教職員が参加したりし、高大接続の強化を図った。

b2. 教員海外派遣研修・立命館大学教職大学院派遣

教員が年間で海外や大学院で研修に専念できる「研修員」制度を持っている。各校の、主に英語科以外の教員が英語力やグローバルコンピテンシーを獲得できるように短期（4週間以内）海外研修を一貫教育部の予算で継続して実施しているが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策の影響で派遣できなかった。ただ、最新の教育理論について学び、教科指導力の向上を目的とした立命館大学教職大学院での有給研修（2年間）は継続しており、立命館宇治中高からは1名の教員が参加している。

b3. 海外日本人学校への教員派遣

シンガポール日本人学校への教員派遣（約2年間）を今年度から実施している。海外の帰国生教育の到達点、現地の教育事情から多くを学ぶことのできる機会として、今後も教員の派遣を実施する予定である。

c. 継続的実施のための計画

我が国の教育全体のグローバル化を牽引することは、社会貢献をめざす本法人のミッションでもある。本学園の長期計画である「R2030」では高校と大学の接続教育の探究学習の継続をテーマとした取組が謳われており、上記の海外派遣等の取組を継続して行うこととしている。また、さらに、ALネットワークにおいても「自走」のための意見交換がなされ、さまざまなアイデアが提起されているので、実施のための検討に入りたい。

【ALネットワークの形成】

a. AL ネットワーク事務局会議及びAL ネットワーク推進会議

法人と拠点校担当者間の事務局会議、国内事業連携団体を含む推進会議を、継続して実施している。事務局会議は、週1回のペースで会議を開催し、新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急措置による休校期間以外は毎週実施し、十分な情報共有と計画が行われた。

AL ネットワーク推進会議についても、特に、4月から6月にかけては毎週のように休校期間におけるオンラインでの指導のあり方に関する情報共有ミーティングをオンラインで実施し、計8回AL ネットワーク勉強会として、各校や連携企業・機関からの貴重な情報交換ができた。1月には正式なAL ネットワーク推進会議もオンラインで実施し、新たな連携校や企業を迎え、AL ネットワークの拡大を図ることができた。

b. AL ネットワーク情報共有体制と共同事業の開発

上記「実施体制の整備」bに記載したように、情報の共有体制を整備している。また、今年度は、共同事業についても、オンラインを活用し、ラオス研修（2回）とフィリピン研修を共同事業で実施することができた。また、さまざまな海外の高校生国際会議にもオンラインで参加することができた。それらの成果の一端として、12月の「全国高校生フォーラム」では、立命館宇治との取組みから学んだことを福岡雙葉の生徒が発表したり、立命館宇治の生徒と台湾の高雄市三信高級家事商業職業学校の生徒が共同で発表したりと、実を結んだ。

c1. 海外大学進学希望者支援・啓蒙

この間、立命館大学の、オーストラリア国立大学（ANU）と共同したグローバル教養学部（GLA）や、アメリカン大学との共同学位を得ることができる Joint Degree プログラムを持つ国際関係学部とも連携し、海外で学ぶことの意義を伝え、海外大学への進学や留学を希望している生徒への啓蒙を実施した。特に、下記に挙げる「英語トップアッププログラム」参加者への啓蒙に重点を置きつつも、また、その他の生徒にも、海外のNPO と連携し、一貫教育部主催で「立命館トップグローバルスクールズ講演会」をオンラインで実施し、生徒の主体的な意欲を高める取組みを行った。

c2. 海外提携大学を活用した高校生留学プログラム、特にギャップイヤー留学の実施

今年度は、コロナ禍の影響により、実施してきた高3の1月から3月にかけて立命館大学の協定大学のカナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）での3か月の English Intensive Program や、同じく立命館大学と学生交換協定を結ぶアイルランドのダブリン・シティ大学（DCU）での1月から4週間の英語集中プログラムは、実施できなかった。

立命館大学とカリフォルニア大学デービス校（UC Davis）が共同開発した、Global Online Study という SDGs を学ぶオンラインプログラムに附属校生徒も参加できることに交渉し、立命館の4高校から計4名の参加者があった。

c3. 英語トップアッププログラムの実施

学校法人立命館一貫教育部が主宰し、立命館附属校に所属する生徒（英語の成績で一定基準を超えた者）を対象に、英語力の一層の向上を目的として、TOEFL iBT®テスト受験に向けての講座を、夏季休業期間、2学期の隔週土曜日、春季休業期間に、実施した。立命館大学の GLA や国際関係学部の協力を得、夏季集中講座と2学期の講座はオンラインでの実施であったが、春季集中講座は GLA のある大学キャンパスで実施する等、高校生の意欲を高める工夫をした。

d. 事務局体制及びカリキュラム開発の人材配置

法人の一貫教育部の部付部長が、WWL の責任者として、毎週の WWL 事務局会議にも参加し、WWL の取組をより効果的にするために、教育課程の編成においても AL ネットワークの拡大においても、各種助言を行った。また、各運営指導委員会の先生方や検証委員会の先生方とも意見交換を行い、ご助言をいただいた。

e1. 高校生国際会議の開催状況

2020年度は総じてオンラインでの企画となったが、拠点校の立命館宇治高等学校が主催するものでは、11月には「全国高校生、（FOCUS）2020」および Global Youth Forum を同時開催し、国内校51校、海外校14校の生徒達、および APU の学生や AL ネットワークの連携企業・団体からの参加を得て高校生たちがお互いの社会課題の解決に向けてのプロジェクトを議論のなかで、お互いに高めあった。また、2月には「AFTER FOCUS」として、その後のプロジェクトの進捗状況や課題を共有し、お互いが持つ社会課題への認識を深めるとともに各プロジェクトの社会実装に向けての方策を出し合った。

8月には、Sri Aman Environmental and English Youth Leadership Online Summit 2020 に参加したり、INS2.0 ISIF ではオンライン国際会議で重要な役割を果たしたりするなどし、9月には WYM（World Youth Meeting）をオンラインで開催した。12月には ASEP（Asian Students Exchange Program）に AL ネットワークの連携校とともにオンライン参加した。また、12月には、昨年度から実施している MUN（Model United Nations）を、オンラインで実施し、立命館宇治高等学校の生徒と連携校の生徒達が参加した。連携校である立命館高等学校が主催する Rits Super Global Forum（RSGF）もオンラインとなったが、立命館宇治高等学校の生徒が参加した。

e2. 高校生国際会議の準備状況

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急措置により、余儀なくさまざまな国際会議がオンラインでの実施となったが、反対に、このグローバル社会の中でのオンラインの可能性を確認できた面もあった。今年度は、予定をしていた Global Youth Fair を全国高校生 SR サミット（FOCUS）と合体してオンラインで行う形での実施となった。生徒にとっても教員にとっても、日本語と英語の分科会をそれぞれ設けるなど手間と労力がかかる面はあったが、生徒の成長をはじめとして成果も大きかった。

これらのことを踏まえ、次年度の実施形態を、新型コロナウイルスの状況も見極めながら、

| | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------|--------------------------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | フィリピン | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | マレーシ ア等 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | |
| 【2】 (2)Global Youth Fair 開催 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | 本年度は SR サミット FOCUS と合体運用 | | | | | | | | | | | |
| 【2】 (2)SR サミットの充実と実施 befgh | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 【2】 (2)国際会議や海外研修の分類 bef | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | | |
| 【2】 (2)連携校の取組のサポート bfgh | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 【2】 (3) ISN2.0 bcefg | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 【2】 (4)留学生増加 i | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 【2】 (5)研究会・研修会 bf | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | | | | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 【2】 (5)検証・検証委員会 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | |

(2) 実績の説明

管理機関と拠点校，連携機関が協働で行ってきた WWL 研究開発の取り組みは以下の通りである。

【研究開発・実践】

a. 生徒課題研究に設定したテーマ

「SDGs 実現に向かってアクションを起こそう

～Diversity and Inclusion～ 多様性を受容し協働できるグローバル社会の実現に向けて」

高校生が AL ネットワークを活用しながら，多様な背景を持つ者が互いを尊重しあって協働する仕組みを構築し，世界と日本の 10 代がグローバル社会の一員として SDGs，特に貧困や教育問題を中心とした様々な課題の解決に向かう社会の実現を目指した。テーマにあるように，アクションを起こすことを求めており，IM コース Global Leadership Studies.においては，オンラインで 2 回実施したラオス研修とリンクして，実際にアクションを起こした。コロナ禍で，アクションを起こそうにも従来の手法が取れないため，今まで以上に知恵を絞る必要があった。あるチームはクラウドファンディングを成功させ，途上国の支援する生徒の学びを継続させることに成功している。

IG コースでは，コア探究の完成年を迎えた。本来ならば課題研究のためのフィールドワークなどが活発に行われるはずであったが，コロナ禍において実現していない。しかしながら，各自のテーマに沿って身近なところからの課題解決に取り組むことができた。また，隣接する宇治市植物公園活性化プロジェクトなど，地域と連携する取り組みが行われた。学校設定科目の SDGs も完成年を迎え，身近な SDGs に向けた改善を提案し，実行に移し，報告にまとめた。文科探究などでも，映像作成を通して，探究活動を深めることができた。具体的な授業内容は，7 (2) f. に記載する。

b. 大学，企業，国際機関と協働で行ったカリキュラム開発

<AL ネットワーク推進会議による大学，企業，国際機関との協議>

AL ネットワーク推進会議は，大学，連携校を含む AL ネットワーク参加団体代表者による会議で，1 回の持ち回り会議と，1 回のオンライン会議が行われた。この会議の中で，各団体から，共有できるリソースの提案，拠点校の取り組み共有などが行われ，それをベースに国際会議，海外研修，新しいプロジェクト等が議論された。4 月から 6 月にかけて，AL ネットワークを中心にオンライン授業やオンラインでのプロジェクト振興策を考えるための勉強会が毎週開催され，実質的な推進会議の役割を果たした。

ラオス研修は連携機関の IC ネット株式会社とともに，フィリピン研修は認定 NPO 法人アクセスとともに実施する予定であったが，コロナ禍のため，オンライン研修に変更された。

国際会議関連も含め、生徒の学びを止めないために、ほぼすべての取り組みがオンライン化される中で、全国的にオンラインスキルがアップし、新しいステージに向かい土壌ができた。また、オンラインのメリット・デメリットも明確になり、今後の授業や研修のあり方についても論議できた。詳細は、9. および**研究報告書第5章2. (4)**に記載する。

<全国高校生 SR サミット FOCUS (SR サミット) + Global Youth Forum (GYF) >

全国高校生 SR サミットは、経団連より2020年11月17日に発表された「Society 5.0 に向けて求められる初等中等教育改革 第二次提言—ダイバーシティ&インクルージョンを重視した初等中等教育の実現—」の14ページにコラムとして引用された。

この取組は、各校で進行中または計画中のプロジェクトを持ち寄り、他校の生徒や社会人・国際学生など様々な視点を入れながら、参加者が担当の他校プロジェクトを自分のプロジェクトのつもりで揉み直す取り組みである。7月下旬に予定していた第3回 SR サミットは、1学期前半の学校休校等の影響で生徒のプロジェクト準備ができていないため、余裕を持たせ、11月にオンライン開催することとした。また、GYFは11月に予定していたが、海外から来日がコロナ禍で難しくなったため、これもオンラインとし、SR サミットと GYF を同時開催にし、SR サミットの内容を海外校にもやってもらえるように調整した。

昨年の第2回 SR サミットでは、18校19チームが集まったが、本年度はさらに目標を大きく置き、GYF との同時開催であることと、オンライン開催で参加しやすくなったことなどから、国内51校・海外14校(4カ国)の65校370名、84プロジェクトの参加となった。国内校51校は、日本の学校の1%にあたる。また、会をサポートいただくメンターとして、連携機関・団体を中心に社会人50名、立命館アジア太平洋大学の国際学生22名に協力いただいた。

オンライン開催のため、事前に、グループ分け、揉み上げるプロジェクト内容の共有、Google Hangouts を使った意見交換などを行った。また、FOCUS WEEK と銘打ち、国内外の著名人によるオンライン講演会を連携団体の協力で4日に1回のペースで5回実施し、新しい観点やチームビルディング、プロジェクトの分析方法などを学び、刺激を受けた。

FOCUS WEEK

- 10月25日(日) 10:00~12:00 マサチューセッツ工科大学 石井教授：
未来競創のための出航力・道程力・造山力
- 10月29日(木) 20:00~21:00 タイガーモブ株式会社 <https://www.tigermov.com/>：菊地様
夢はでっかく描こう！バックキャストイング
- 11月2日(月) 20:00~21:00 株式会社リクルート Ring 事務局 <https://ring.recruit.co.jp/>：渋谷様
チームビルディングやプロジェクトの積み方
- 11月6日(金) 20:00~21:00 タクトピア株式会社 <https://taktopia.com/>：長井様
最高のプロジェクトをつくるための4つの質問
- 11月10日(火) 20:00~21:00 認定NPO法人 very50 <https://very50.com/>：菅谷様
世界を変える、問題解決型商品の思考法
- 11月14日(土) 10:00~17:00 アイ・シー・ネット株式会社 <https://www.icnet.co.jp/>：芦田様
プロジェクト解決策の創出について
13:00~15:00 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) <https://j-gift.org/>：木村様
PBL 学習の手法・整理 および オンラインのメリット・デメリット (教員向)

本年度の改善点

- ・オンラインへの移行により、様々な媒体を利用することができた。
Zoom, Google, Hangout, Google Meet, You Tube live stream, Mentimeter, Jamboard, Google form
- ・FOCUS WEEK により、国内外の著名人からレクチャーを受けることができた。
- ・社会人メンターを募り、2週間に渡り高校生のプロジェクトに対してダイレクトにアドバイスなどをして頂いた。
- ・本校内に生徒の運営チームを作ることができた。運営チームは日英両言語で進行を進める事や、運営のパワーポイントの作成、チラシや募集動画の作成をすることができた。

本年度の課題点

- ・一度も出会った事のない生徒同士を結ぶことや、FOCUS のコンセプトなどをインプットすることが難しい。
- ・大人も含めた参加者全員の ICT リテラシーにばらつきがあり、共通理解が難しい。
- ・様々な状況によって、企画当初の要項から大きく変化をし、対応も様々なに変化した。

詳細については別冊**研究報告書第4章3.(1)**に詳述した。

<コア探究>

本年度は、年次進行で高3までの完成年となったが、コロナ禍の休校等で対面授業のできない時期もあり、オンラインでもある程度の取り組みが可能であることも実証した。昨年に引き続きマイプロジェクト in 立命館宇治の開催、新規に、研究報告会での全員発表 (Zoom) など、生徒の発表の場、評価を受ける場を昨年より多く作った。隣接する宇治市立植物公園の活性化プロジェクトの発表を植物園で行うなど、新しい取り組みも着実に進んだ。

キャリア形成と密接に結びついた探究カリキュラムを作るためには、中高接続・高大接続の視点は欠かせない。本年度までは学年主体にカリキュラムを作り上げてきたが、その良さを残しつつ、次年度よりキャリア教育部にて中高接続、課題研究における各団体や大学の協力、また、アウトプットの場における研究の評価など、様々な連携を行う予定である。

本年度実施の取組は**コア探究実施報告書**に詳述する。

<Global Leadership Studies (GLS) >

第1ステージ

4月当初はオンラインでのスタートとなったため、例年のように宇治の街のフィールドワークなどは行えなかった。オンラインでもできる取り組みとして、自分の街紹介→宇治についての調べ学習と共有→自分が好きな日本、嫌いな日本という流れで徐々に範囲を広げ、最終的には私と日本文化というテーマで動画を制作する日本文化アンバサダー動画制作プロジェクトを実施した。授業を実施するにあたって、講師として連携企業の Learning in Context (LIC) の空田様にご協力をいただいた。空田様と議論を行う中で、単なる日本紹介動画の制作ではなく、動画制作を通して下記の4つの力の育成を行うことを目的に授業を設計した。

4月17日(金) ガイダンス GLS とは

4月24日(金) 自分の街紹介 本校教員

5月18日(月) 宇治の文化調べ学習と紹介 本校教員

6月 3日(水) 動画づくりを通した学び方 第1回 ガイダンス：動画作りの意義と日本文化 Learning in Context (LIC) 空田氏・植竹氏

7月15日(水) aeru school 伝統産業 講演会およびワークショップ 株式会社 和える矢島氏

7月25日(土) 動画づくりを通した学び方 第2回動画構想：プロと一緒に自由な発信を楽しむ テレビディレクター清水氏 LIC 空田氏・植竹氏

8月29日(土) 動画づくりを通した学び方 第3回途中報告会&他者からの視点を取り入れる LIC 空田氏・植竹氏

9月 2日(水) 海外から見たお茶の魅力とその発信について

About the appeal of tea from overseas シェンゲン 澤田氏

9月12日(土) 動画づくりを通した学び方 第4回動画発表会&リフレクション LIC 空田氏・植竹氏

第2ステージ

スローガン：Expand your horizons

目 的：グローバル社会の第一線で活躍する方々にお越しいただき、それぞれの専門分野やキャリア、志についてお話をいただくことで、グローバル社会に対する視野を広げると同時に自分のロールモデルを持つ

対象生徒：IM コース1年生(66名) および2年生3組(37名)

実施内容：現在のグローバル社会を取り巻く様々な社会課題の解決に取り組まれている方や、グローバル企業で国際社会の最前線で活躍されている方、連携機関の方に講演いただいた。ご講演の前には必ず事前学習を行い、また講演後には振り返りを行うことを大切にしてきた。

第3ステージ

スローガン：Make a difference in yourself, Make a difference in the world.

目 的：課題解決型学習をとおして、生徒の課題解決能力を養うとともに、生徒が社会への関心や自分が社会の一員であるという意識をもち、社会課題の解決に貢献すること。

対象生徒：高校3年生63名 実施期間：2020年4月～2021年1月

実施内容：GLS 第3ステージでは高校3年生が自分の解決したい社会課題を解決するための解決策を提案し、実際にアクションを行うという前提で授業計画を作成している。連携企業のアイ・シー・ネット 株式会社と連携を行いながら、大まかに以下の流れで授業を展開

した。なお、コロナ禍の影響もあり、アイ・シー・ネットの講義は全てオンラインにて行われた。

- ステップ1：社会課題への関心の情勢
- ステップ2：興味のある分野の特定と調査
- ステップ3：プロジェクトチームの編成
- ステップ4：プロジェクトのミッションの作成とテーマについての調査
- ステップ5：解決したい社会課題の洗い出しと絞り込み
- ステップ6：社会課題の解決策の洗い出しと絞り込み
- ステップ7：アクションの実施
- ステップ8：リフレクションと再検討

2学期以降はチームごとの状況に合わせ、随時アクション→リフレクション→改善策の提案→アクションの再実施というサイクルで授業を行なってきた。多くの探求型学習やPBL型学習が調査や提案で終わるのに対し、GLS3rdではアクションの実施にこだわっているため、生徒たちは様々な社会の人々との連携を行いながら、活動を実施した。ここでもコロナ禍ならではの問題が出てきたが、生徒たちはそれぞれの工夫を行い、見事に活動をやり切ることができた。

到達点

・課題の特定のための取り組み

昨年の2月から登校禁止となったため、例年行っていた研修旅行を含め、様々な高校3年生に向けた取り組みが中止された。オンライン会議システム Zoom をいち早く駆使し、GLS 3rdの課題特定のための様々なセッションを3月から5月にかけて行なってきた。例えば、宇治市から呼びかけが行われた Cool choice 事業について、オンラインで講演会を行い、その結果、11名の生徒が環境問題について探究を行うことを決めた。また、卒業生が高校3年の時に実施していた、プロジェクトについて Zoom にて紹介や引き継ぎを行なってくれたおかげで、後輩たちは有意義な準備期間を過ごすことができた。このように課題を特定する際に、Zoom を用いたことで、例年以上に多くのインプットを高校3年生に与えることができ、その結果、それぞれが明確な目的意識を持って、プロジェクトのテーマ設定を行うことができた。

・ラオス研修のオンライン実施

IM コースでは2016年から実際にPBLの一環として生徒をラオスに派遣し、現地との様々な協力活動を行なってきた。今年度は海外への渡航が制約される中、オンラインでのラオスフィールドワークツアーを実施した。現地に行かなければ得られない学びがあることは事実であるが、オンラインならではの良さも実感することができた。特に、全国にあるALネットワーク校と連携し、一緒にツアーを作り上げることができたのは、地理的制約、人数的制約が小さい、オンラインならではの成果であった。

・クラウドファンディングの実施

例年、ラオスの高校生の就学支援金のチャリティー活動として、一部のチームがベークセールなどを実施していた。しかし、食品の調理や販売が困難な情勢において、ベークセールやイベントの実施は断念し、クラウドファンディングという新しい挑戦を行なったチームもあった。クラウドファンディングの実施に当たっては、ALネットワーク校ですでにクラウドファンディングの実施経験があった鳥取の青翔開智高等学校や高知商業高等学校にアドバイスをもらうなどして、実現に漕ぎ着けた。これらの学校とのミーティングも全てオンラインで実施した。これらのことから、コロナ禍という制約の中でも、工夫を行うことで大きな成果につなげることができるという、リアルな学びを得ることができた。

本年度のその他の取り組みは**研究報告書第3章4**に詳述した。

c. 外国語を用いて行う文理融合探究科目のカリキュラム開発

<SDGs>

昨年度より、IG コース2年生の選択科目として、SDGs が設置された。本年度には年次進行で、3年生にも設置された。本年度は2年2クラス、3年1クラスが開設され、英語ネイティブ教員2名が担当し、イマージョンにより行われた。授業は身近な課題発見から開始された。SDGsにかかわる実例の学びから、自ら目標を立て、提案を書き、その後、実践、振り

返り、修正、発表を繰り返し、プロジェクトを実行していく流れを作った。

食堂の食べ残しをコンポストに入れて肥料とするプロジェクトなど、実際に校内にコンポストを設置して運用を開始し、得られた肥料を校内に植樹したブルーベリーに利用することが実現したプロジェクトも生まれている。また、波及効果として、生徒が自ら動く機運が高まり、日ごろスポットがあまり当たらなかった保健委員会が、コロナウィルス感染予防のための呼びかけ運動を実施するなど、校内全体の取り組みが、コア探究と相乗効果でアップしている。

SDGs 授業のシラバスは以下の通り。詳細は、**研究報告書第3章3**に記した。

Ritsumeikan Uji Junior and Senior High School 2020 SYLLABUS

| Jr Sr | Course | Year | Credits | Dept. | Course title | Main textbook | Supplementary textbook |
|-----------------------|---|--|---------|--|--|----------------------|---|
| Sr | SDG studies | 2 | 3 | Eng. | SDG studies | News Articles | Pathways Listening and Speaking 2 |
| Goals | | Students will create, plan and implement projects to lead our school and community closer to achieving the SDGs. Students will promote awareness of the SDGs in our school and community. Students will show responsibility as future leaders. Students will assist the 2 nd year students with advice about their projects. Students will commit to volunteer activities and community service this year and beyond. | | | | | |
| Aspects of Evaluation | Knowledge and skills | Ability to think, to judge, to express | | Motivation toward learning | | Test schedule | |
| | *Planning and executing projects based on the 17 SDGs. *Reflection on the above projects. *Participation in volunteer activities outside of class (not explicitly evaluated, but encourage) | *Presentation of ideas (projects) to their class and grade members. *Understanding of government and non-government institutions. *Knowledge of current events. | | Attitudes to learning: ● Communication ● Working together ● Organization ● Commitment to success ● Reflection | | | Course work |
| | | | | 1 st term | X | X | 100 |
| Evaluation Method | Project planning, reporting. | Quizzes, short reports Journal entries on news articles and stories. Reflection on projects | | Teacher-guided, self-assessments at the end of each term | | 2 nd term | 100 |
| | | | | 3 rd term | X | X | 100 |
| | | Ave. of CW(%) | | | | Ave. of CW(%) | |
| Yr.Schd. | Hrs. | Unit of Themes | | | Unit Goals | | Unit of Evaluation Method |
| 1st Sem | Mid-term | Grade Level Project- The students will form teams, choose a project related to the SDGs, plan it, implement it, report on results and reflect on successes and failures. | | | Successfully completing a project (please note, success means seeing the project through, not necessarily the project showing favorable results.) Reporting on this project and reflecting on it. | | Quizzes Journals Project planning reports, project reflections. |
| | Final | | | | | | |
| 2nd Sem | Mid-term | Schoolwide or Community Level Project- The students will form teams, choose a project related to the SDGs, plan it, implement it, report on results and reflect on successes and failures. | | | *Successfully completing a project (please note, success means seeing the project through, not necessarily the project showing favorable results.) Reporting on this project and reflecting on it. | | Quizzes Journals Project planning reports, project reflections. |
| | Final | Model United Nations | | | *ALL third year SDG students will be strongly urged to participate in some form in the Rits Uji MUN | | |
| 3rd Sem | Final | Project summaries, reflection and presenting to 2 nd year students. | | | The third-year students will be required to come up with a reflection on their work in SDG studies and deliver it in a speech to their juniors. | | Course reflection in essay and presentation form. |
| Remarks | Guest speakers are welcome and wanted to speak to students about SDG related issues. | | | | | | |

<IB コース>

IB コースのディプロマ取得のための学びは1 学年 1 月から 3 学年 11 月の約 2 年間である。本校ではほぼすべての IB 科目を英語ネイティブ教員が、一部の科目を英語で授業ができる日本人教員が行っている。日本の教育課程の科目に読み替えが可能な科目については、英語ネイティブであっても臨時の助教諭免許が取得した教員が担当している。この期間以外は、日本の高校を卒業する要件を満たすために、国語総合、世界史 A、日本史 A、現代社会、科学と人間

生活、生物基礎、美術 I、体育、保健、家庭基礎などの授業が行われている。

<IM コース>

留学帰国後の生徒には、学校設定科目として、Citizenship, Mathematics, Science for SDGs, International literature, Academic Communication, Theory of Knowledge の 6 科目をイメージで実施した。それぞれの科目は、IB 同様に日本の助教諭免許を取得できた教員が担当している。

d1. カリキュラムに位置づけられた海外研修開発ーラオス

ラオス研修は昨年同様年間 2 回の実施予定であったが、コロナ禍のためにオンライン開催とした。初めてのオンラインでの海外研修の構築であったため、試行錯誤であった。現地との接続についてはライブ感を出せるように、実際に街を歩きながらの中継などを行うことができた。ある地点でのインタビューが始まったら、1 名のスタッフが次の場所へ先回りして準備をするような、配信側の移動時間が受信側の無駄な時間にならない配慮を行った。

8 月 17 日～20 日に実施された本年度 1 回目の研修では、オンラインで参加しやすいため、市川高等学校・名城大学附属高等学校・青翔開智高等学校・福岡雙葉高等学校・宮崎県立飯野高等学校、宮崎県立宮崎大宮高等学校、立命館宇治高等学校から生徒 49 名が参加した。従来の立命館宇治における取組も行ったが、オンラインであるために、生徒にやや主体性が欠ける部分も見られたが、今まで以上に多くの生徒たちに影響を与えることができた。一方で、昨年同様にオンライン下でも、研修を連携校と共同で行うことで、生徒にほどよい緊張感が生まれ、違った背景を持つ他校の生徒から影響を受けあう場面が見られた。

1 月 9 日・11 日・16 日実施の 2 回目では、福岡雙葉高等学校、宮崎県立飯野高等学校、宮崎県立宮崎大宮高等学校、立命館宇治高等学校から 56 名が参加した。一部のコンテンツを 2 か所に分けたり、事前学習を強化したりするなどして、実施内容を改善した。

本研修は、ODA などを手がけている連携機関のアイ・シー・ネット株式会社の協力を得て、IM コースの授業 Global Leadership Studies と連動させて作り込んできた。WWL になってからは、この研修を本校他コースの生徒のみならず、連携校の生徒にも開放し、一緒に行うこととしてきた。この研修の連携校へ与えるインパクトは大きく、福岡雙葉高等学校などでは、参加生徒たちを中心とした新しいプロジェクトがスタートしている。

本校においても、現地からの学びと支援を止めないという、生徒の強い思いを受け、海外研修をオンラインの形で実施できたが、現地の支援活動自体がコロナ禍で制限される中、高校生がクラウドファンディングに挑戦して成功している。すでに連携校においてクラウドファンディングの経験のある学校からの協力を得たことも大きい。オンラインでのプレゼンテーションでのアピール、返礼品にラオスコヒーを使用するなど、その活動が評価され、目標額が集まり、現地の支援を継続することができたことは、生徒の大きな自信につながった。

詳細は別冊研究報告書第 5 章 2 (1) および第 6 章 9 に記載した。

d2. カリキュラムに位置づけられた海外研修開発ーフィリピン

フィリピン・オンライン・スタディーツアーを認定 NPO 法人アクセスの協力で実施した。参加者は愛媛県立三崎高等学校から 4 名、宮崎県立飯野高等学校から 3 名、立命館守山高等学校から 4 名、立命館宇治高等学校から 5 名の合計 16 名であった。

本研修の目的は、以下の 4 点である。

- 1) 発展途上国の都市貧困について、人々の生の声に触れることで、理解を深める。
- 2) フィリピンの同世代との交流から、グローバル課題を自分事としてとらえる。
- 3) パンデミックがフィリピン人の生活に与えた影響を知り、日本との違いを考える。
- 4) 課題解決のために行動しようとする意欲を醸成する。

今まで実施のオンライン研修等の経験を活かし、できるだけ生徒の発言を引き出すようにするとともに、実際のアクションにつながるように、6 日間の日程が計画された。

- DAY0 2 月 05 日 (金) 事前研修 1 事前課題の共有
DAY1 2 月 06 日 (土) 事前研修 2
DAY2 2 月 16 日 (火) 現地と接続しての研修 1 コロナ禍のフィリピン
DAY3 2 月 18 日 (木) 現地と接続しての研修 2 発展途上国の都市貧困
DAY4 2 月 19 日 (金) 現地と接続しての研修 3 UP の大学生と貧困問題を考える
DAY5 2 月 20 日 (土) 事後研修 振り返り・今後に向けて

非常に厳しい都市封鎖を伴う措置がとられるフィリピンにおいて、オンラインでの研修実施も厳しいかもしれないと、最悪実施が難しくなることも想定の上で、オンラインでもできること、オンラインだからこそできることの2点を意識して、内容について検討した。その結果、あらかじめビデオで収録しておく部分と双方向で話し合う部分を組み合わせる計画し、最悪でもビデオを通して学ぶことができるように準備をすすめた。

この研修でのポイントは以下の通り。

- 同時双方向だけにこだわらなかったために、実際に現地を訪れても踏み込むことのできない場所まで、事前取材の動画等で知ることができた。これは今までのオフラインとは違う大きなメリットであった。今後、このようなコンテンツとオフライン研修をあわせることで、より効果的な研修になることが期待できる。
- 事前研修を充実させた。事前研修時間内に、小グループ内（5グループ：同グループは同テーマ）でお互いに調べたことを共有した後、短時間で一つのプレゼンにまとめさせたことで、自分の担当領域の知識が深まった。その後、全体で各グループからのブラッシュアップされたプレゼンを共有した。これにより、共有内容も、最優秀作を共有するのと違い、偏りが少なくなり、包括的かつ深くなった。
- 連携校の生徒同士が事前に上記の作業をすることで交流し、本番で質問や意見が出やすいようにした。
- 事前課題には、研修地の紹介ビデオ視聴、意見交換する人の紹介文を読んでおくことなども含め、意見交換のイメージができるようにした。
- 意見交換のきっかけになるように、日本の貧困状況や自分たちの生活について発表する人を決め、全員が3日間のいずれかで、相手に何かを伝えるようにした。お互いに情報を交換することで、対等に意見交換ができるようになった。
- 対話でないと聞くことができない質問が良い質問とのアドバイスがあった。質問を立てるとき、自分にその質問を向けることで、調べればわかることなのか、対話でなければ知り得ない適切な質問かがわかる。
- 話せば言葉がまとまっていくもので、沈黙の理由を言うのもあり（例：頭がパンクしそう・初めて聞くことで驚き）というアドバイスもあった。とにかく話してみることが相互の理解につながることを生徒たちは認識した。
- 事前学習、貧困層およびこれからのフィリピンを担うフィリピン大学(UP)の学生、現地 NGO の3者との意見交換で、総合的にフィリピンの現状と支援の方向性を考察できた。

詳細は**研究報告書第5章2(3)**に記載した。

d3. ケニアの障がい者施設のリアルと食

クックパッド株式会社と協働し“ケニアの障がい者施設のリアルと食”をテーマとした研修を実施し、本校生徒20名が参加した。研修先がアフリカのケニアであったが、感染症対策や安全性、移動の時間などを考えれば、なかなかアフリカまで生徒を連れて行くことができなかった。オンラインであればその実現ハードルが低くすることができた。

ケニアの障がい者施設の動画を全員で視聴し、次の3点について意見交換をした。①自分と登場人物のジョセフが全然違うと思うところ（環境、条件、資質、その他なんでも）②自分とジョセフが似ているところ、近いと思うこと ③障がいのあるジョセフがより良く生きる為に必要だと思うことなど、自分自身を見つめ直す機会になった。

ケニアと繋いだDAY1では、ケニアナイロビで働いている小児科医の公文先生とオンラインで繋ぎ、“生きるとは” “幸せとは”を真剣に考えることが出来るように、自分が日本のこの家族に生まれてきた必然性やケニアの事情を鑑みながら生について深く考えた。事前学習では、“親に自分が生まれた時の様子”、“その時家族がどのように感じたか”、“それを聞いて自分はどう思ったか”を親と話す宿題が出されたが、両親がどのように自分を大切に想ってくれていたのかを知り、また他者に対してもそのような愛情を注げるのかを考え、深い学びの機会になった。

自分を育ててくれた親に感謝するおにぎりや、障がいを持ったケニアの子供に食べやすいおにぎりなどを、様々な観点から作った。実習をZoom越しで行ったが、場が活性化し、非常にインタラクティブとなり、新しい挑戦だった。また、後半ではケニアの障がい児に対して、料

理を考えることを行い、それぞれ独創的な料理を考えていた。公文先生もメモを沢山とっており、今後採用されるかどうか楽しみである。詳細は**研究報告書第5章2(2)**に記載した。

e.文理融合型カリキュラム編成

IG コースにおいては、コロナ禍の中ではあるが、年次進行で高校3年まで完成した。

IMコース

| 学年\時間 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | EX | | |
|-------|----|----|-----------|---|---|----------------|---|---|-----------------------------------|-----|---------|--|-----|----|-------------|------------------|-------|------|--------------|---------|---------|---------|------|------|----|----|----|----|----|----|----|----|--|--|
| 1年 | 保健 | 体育 | 国語総合 | | | 現代社会 | | | 数学Ⅰ | 数学A | 科学と人間生活 | 社会と情報 | 美術Ⅰ | | | コミュニケーション英語Ⅰ | 英語表現Ⅰ | 英語特修 | 家庭基礎 | 総合探究GLS | HR | 土曜講座 | | | | | | | | | | | | |
| 2年 | 保健 | 体育 | 日本語Ⅰ | | | 日本史A | | | 世界史B | | | 数学総合A | | | 化学基礎 | 美術Ⅱ | | | コミュニケーション英語Ⅱ | 英語表現Ⅱ | TOK | 総合探究GLS | HR | 土曜講座 | | | | | | | | | | |
| 3年 | 体育 | | 日本語Ⅱ(小論文) | | | Citizenship(社) | | | International Literature(Reading) | | | Academic Communication(Writing & Presentation) | | | Mathematics | Science for SDGs | 第二外国語 | | | TOK | 課題研究GLS | HR | 土曜講座 | | | | | | | | | | | |

※TOK IBの基幹科目のTheory of Knowledge
※太字は完全イマージョン授業

IGコース

| 学年\時間 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | EX |
|-------|----|----|------|------|------|----------------------|---|-----|---------------------------|-----|----------------------------|---------------------------------------|---------------------------|----------------------|--------------|--------------|------|------|------|----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 1年 | 保健 | 体育 | 国語総合 | | | 現代社会 | | | 数学Ⅰ | 数学A | 科学と人間生活 | 社会と情報 | 芸術Ⅰ | | | コミュニケーション英語Ⅰ | PESⅠ | 家庭基礎 | コア探究 | HR | 土曜講座 | | | | | | | | | | |
| 2年 | 保健 | 体育 | 日本語Ⅰ | 日本史A | 世界史A | | | 数学Ⅱ | | | SDGsⅠ 数学Ⅰ 倫理 政治経済 | 化学基礎 地学基礎 | 物理基礎 文学総合 PDEnglish | 生物基礎 芸術Ⅱ 第2外国語 | コミュニケーション英語Ⅱ | PESⅡ | コア探究 | HR | 土曜講座 | | | | | | | | | | | | |
| 3年 | 体育 | | 数学Ⅲ | | | 物理探究 化学探究 歴史探究 | | | SDGsⅡ 文科探究 物理/化学/生物 | | | 文化と表現 芸術探究 統計学 プログラミング 簿記 | | | コミュニケーション英語Ⅲ | PESⅢ | コア探究 | HR | 土曜講座 | | | | | | | | | | | | |

※PES: Productive English Skills

※コア探究: 総合的な探究の時間/2018年度から研究開発学校として研究開発を開始

高校3年では、全員が探究を含む物理・化学・生物各5単位より1科目を選ぶことが可能で、理科を重点で学びたい生徒は、選択した探究を含む科目以外の物理・化学・生物から1科目4単位をさらに選べるようにした。それ以外の生徒は、SDGsや文科探究を選択できる。その他の選択科目群では、文化と表現・芸術探究・統計学・プログラミング・簿記など多様な科目から選択できるようにした。また、数学Ⅲと同じ選択群には、日本語Ⅱ+数学総合をセットで置き、文系の生徒にも数学を必ず学ぶ機会を置いた。

コア探究やGLSなど、連携機関や連携企業との取り組みを含む科目については**7.(2)b.**「大学、企業、国際機関と協働で行ったカリキュラム開発」の項に、SDGsの授業については**7.(2)c.**「外国語を用いて行う文理融合探究科目のカリキュラム開発」の項に示した。科学と人間生活については、昨年報告した内容を、一部オンラインで実施した。

<文科探究(English in Media)>

本科目は以下の“3つの主たる目標”を念頭に置いて構成した。

- ① メディアの読み取り方・特性を学ぶ
- ② 映像・音声・文字を使ったコミュニケーション能力の醸成
- ③ 異なる視点から物事をとらえることの重要性を認識する

高校生以上がSNSに動画を投稿することはもはや当たり前のことになっている。今や誰もが日常的に映像情報の送受信者になりうる状況である。その一方で、生徒たち(大人たちも含めて)は、映像メディアの“読み方”すら教わる機会がない。映像メディアは、言語情報よりも保持する情報量が多いため説得力があり、1つの情報を全面的に信頼してしまう事で事実を誤認してしまうことが多々ある。上記の状況を踏まえ、「①メディアの読み取り方・特性を学ぶ」を設定した。英語も、生徒は「覚える」ことに終始しがちである。「伝える」ことは外国語学習の本質であるにもかかわらず、それが生徒にとって非常に遠い目標になり、英語を学ぶことに対するモチベーションを低下させる一つの要因にもなっている。映像の助けを借り、英語というハードルの高さを克服することで、「生徒自身が伝えたい内容」を形にする経験を積ませることを2つめの目標(②映像・音声・文字を使ったコミュニケーション能力の醸成)とした。

ノンフィクションのドキュメンタリー作品などは公平・公正な立場から製作されなければならないため、制作者は、たとえ映像化しない部分であっても幅広く取材し、知識を得なけれ

ばなりません。そのプロセスを通して、「物事にはさまざまな見方や表現方法がある」のだと体験することを3つ目の目標とした。

<カリキュラム概要>

| プロジェクト | 内容 | 目標 |
|---------------------|---|----------|
| オリエンテーション | 1年間の計画 | |
| “最高の1本”プレゼン | 「自分の好きな映画」について英語でプレゼンテーションを行う。 | ①② |
| 翻訳について学ぶ | 字幕, 吹替, ボイスオーバーなどの翻訳映像技法について学ぶ | ①② |
| 日⇒英翻訳作品を作る | 日本昔ばなし「子守きつね」を題材に, 英語吹替作品を作る。役割分担をしつつ, プロジェクトを成功に導くためのチーム作りについて学ぶ。 映像編集技術について学ぶ(1)。 工夫を共有し, 次のプロジェクトに生かすためのピア・フィードバック。 | ①② |
| 「感動」を作る | 映像作品鑑賞“Real beauty sketch”「感動」はいかにして生み出されるのか? KJ法を用いた分析/分類とディスカッションを通して学ぶ | ②③ |
| 物語の結末を考える | 英語作品“On a flight from Dallas to New York(作品の正式名称不明)”を用いて, 物語の「感動的な」結末を考える。 | ② |
| 映画鑑賞 | 映画“Bicentennial Man”鑑賞 映画はいかにして感動的に作られるのかについてのディスカッション | ② |
| 「面白い」を作る | 英語落語について学ぶ(面白くする要素, 話しぶり, 小道具の使用など) | ② |
| 落語の「オチ」を考える | 落語“A Name for My Kitten (廻り猫)”の冒頭部分から, どのような「オチ」があり得るのか予測し「オチ」を英語で作成する。 | ② |
| English Rakugo 実践 | “Pot Mathematics (壺算)”を覚え実演する。(課題は映像で提出) | ② |
| メディア・リテラシー | メディアは, 必然的に事実の側面を切り取るのだと学ぶ(海外のニュース映像, 写真を題材として) “What I want everyone know”: 校内にある題材から1枚の写真を撮影し, 「記者」として伝える | ① ② ③ |
| 「演じる」ことを学ぶ | 「演じる」とはどういうことか学ぶ。英語で感情を表現することを学ぶ。 | ② |
| 物語作品の「良い構成」について学ぶ | 英文“Writing Your Own Original Screenplay”を読み, 物語の“Good Structure”について学ぶ。 | ② |
| “Tall Girl”鑑賞 | 映画“Tall Girl”鑑賞“Good Structure”に基づき, “Tall Girl”を分析する | ② ③ |
| 記憶に残る作品を作る技法について考える | 記憶に残るメッセージの要素(SUCCESS)を学ぶ 課題図書) Made to Stick (Chip Heath & Dan Heath 著) | ②③ |
| ショートフィルムを作成する | 台本作成の技法について学ぶ。 撮影の技法(カメラ割り, スケジュール等)を学ぶ。 “Diversity”を題材として, 映像作品を作る。 編集技術について学ぶ(2): 音声を編集するだけでなく, 映像を編集する技術を学ぶ。 | ②③ |
| ショートフィルム鑑賞 | “作品に込めたメッセージ”が, 適切に伝わったのかに関するディスカッションを行う。 | ②③ |
| 「企画書」を作成する | 魅力的な企画書を書く技法について考える 課題図書) 「人がうごくコンテンツの作り方」高瀬敦也著 | |
| ノンフィクション映像を作成する | “How To Write A Documentary Script”を読み, ドキュメンタリー作成のポイントについて学ぶ。企画書を作成する。 企画検討会を行う。 3つの企画に絞り, 3チームに分かれて取材を行う。(文献での情報収集, Zoom取材, フィールドワークを行う。※事象を説明する映像を作成するには必ず, 2人以上に取材を行う。) 取材した内容をもとに, 台本を作成する。 日本語で取材した内容を, 英語に翻訳し映像化する。(日本人に取材した部分についてはボイスオーバーで映像化) 映像を編集し, ドキュメンタリー作品を完成させる。 | ②③ |
| ドキュメンタリー作品鑑賞会 | 出来上がった映像を鑑賞し, 相互に講評を行う。 | ① ②③ |

<到達点と課題>

計画段階では, ①②③の目標を達成するために, 生徒への負荷が小さい順にプロジェクトを進めていく予定だったが, 新型コロナウイルス流行の影響で年度当初はオンライン授業で進めることになったので, 「オンラインでも実施可能」なプロジェクトから進めていくこととなった。本授業は今年からの開講だったので, どのプロジェクトを先に行くとより深い学びにつながるのかについても, 想定と異なる結果になったところがあった。次年度は, プロジェクトの順序を見直したい。

研究報告書第3章 3. に詳細を記した。

f. 学習活動が構想目的達成に資するように工夫した取り組み

コロナ禍において、学びを止めないこと、生徒のプロジェクトを続行することを優先し、国際会議や海外研修については、すべての取り組みをオンラインで実行した。むしろ、コロナ禍が大きな課題（ハードル）となったが、その課題を解決するための工夫や新しいアプローチを教員と生徒の両方が意識して乗り越えた。

引き続き、コア探究のような学ぶための基礎体力をつける科目、興味を発展させ探究する科目など、生徒の成長に合わせた科目を適切に分類、配置することを意識した。ラオスやフィリピンの研修では、校内対象を IG コースにも広げ、連携校とも合同で行った。オンラインのメリットとデメリットを整理でき、今後のハイブリッド型開発に向けた経験となった。

連携機関や連携校には、情報共有を行い、WWL のコンセプトを十分に理解いただき、積極的な関与をいただいた。SR サミットのファシリテータを務めていただいた企業や団体の方からは、混ざる面白さに気が付いた、高校生の実力は捨てたものではなく将来に希望が持てたなどの意見をいただき、新しく連携団体に加わっていただく団体もでてきた。

g. 高大連携による大学教育の先取り履修

立命館宇治高等学校を拠点校とする AL ネットワークは全国型であるため、スポット講義型、集中講義（研修型を含む）、Web 配信型などを想定し、調整を進めてきた。

昨年度から計画してきた、APU 学生向け海外研修を AP 科目とする件は、コロナ禍における海外渡航の制限により、実施できなかった。

h. より高度の内容を学びたい高校生が学習できる環境整備

学校法人立命館主催の英語トップアップ講座はオンラインに切り替えて実施された。高校3年の1月から3月にカナダの University of British Columbia (UBC) に留学する制度もオンラインでの対応が検討されたが、生徒が集まらなかった。立命館大学とカリフォルニア大学デービス校 (UC Davis) が共同開発した、Global Online Study という SDGs を学ぶ大学生向けオンラインプログラムに附属校高校生も参加できるように交渉し、立命館の4高校から計4名の参加者があった。AL ネットワーク連携校の参加できる海外研修や国際会議関連もオンラインで実施し、その特性と活かし、講演会を増やすなど学ぶ機会を拡大した。

i. 留学生の受入の学校体制

拠点校の立命館宇治高等学校では、留学の出入りにかかわる分掌「国際センター」を組織しており、センター長の教員、職員1名、部員として教員5名を配置した。受け入れにおいては、国際センターが中心となり、配置クラス、時間割等を作成し、日本生活に慣れるためのサポートも行った。長期の留学生については、様々な場でプレゼンテーションを行う機会が設けられ、アジア高校生架け橋プロジェクトの生徒達が、全国高校生フォーラムに出席し、WWL 研究報告会などでのプレゼンテーションを行った。

j. 特筆すべき点

<コア探究が教科を越えた教員の繋がりの中に>

昨年同様、コア探究カリキュラム作りは、学年会を中心とした運営とし、年次進行により高校全学年に広がった。週1回の学年会議の場で授業の状況や進め方を細かく確認でき、生徒の成長に寄り添った授業実践ができた。また、教員自身も、他教科の教員と共に授業実践をすることで、他教科の狙いが見えるなど、相互理解にもつながった。当初、負担の大きさから根を上げていた教員も、生徒の変化と同時に、教員にとっても価値があるものと気がつき、教科教育の改善にもつながった。生徒の力量も確実にアップしていることが、昨年と同様の校内プレゼンテーションの大会の発表よりわかった。

<コロナ禍によっても教員力量がさらにアップ>

単にオンラインツールの使用が進んだだけでなく、教員が自主的にコロナ禍における打開策を話し合った。前項同様に教員自身のカリキュラムマネジメント力量がアップした。

<一つの学校という垣根を越えた学びあい>

本年度も、我々が予想していた以上に、混ざることによる化学反応が良い方向に向かった。これは、生徒だけでなく教員もそうであると昨年報告したが、全国高校生 SR サミットに協力

いただいた社会人メンターの方からも高校生の学び合いに日本の高校生の未来を確信し、ALネットワークに新規に加入いただくなど、日常的に他校の教員や連携企業・団体の方との交流がさらに進んだ。このような枠組みの中で、教育論議ができる点は、教育活動に大きなプラスである。

<ビデオを評価に活用する取り組み>

検証委員会における昨年度から本年度にかけての意見をもとに、次の2タイプのビデオ活用を行った。コア探求においては、生徒の発表の様子をビデオで蓄積した。

① 生徒評価に活用

生徒の最終プレゼンテーションを動画で提出させ、評価やアセスメントに活用した。

これらの動画によって、ルーブリックの精緻化をした。また、それぞれの評価に該当するサンプルを分類しておくことで、新しい担当が評価するときの参考となり、評価のブレをなくすることができる。また、生徒にとっても、優秀作品を観ることで目標設定になる。

② 目標となる先輩像・自己評価時に基準となる生徒像

プロジェクトで成果を上げた生徒とその周囲も含めて取材をし、なぜそのプロジェクトが成功したのか、そのプロジェクトを行ったことでどのような力が伸びたのかがわかるようにした。連携校も含めて4本のビデオを作製し、連携校どうしの取り組みがどのように波及効果を及ぼしたか、周囲をどのように巻き込んでいったかなども含め、ビデオを作製した。このビデオは、入学当時に目標となる先輩像を示すことができ、卒業前には自分の成長を自己評価する際の基準として使うことを意識している。

<立命館宇治を拠点校とALネットワークの全国で取り上げられた事例>

経団連の二次提言コラムに全国高校生SRサミットが取り上げられた。

<https://www.keidanren.or.jp/policy/2020/110.html>

文科省の特別活動の取り組みに本校のリモートHRの事例が取り上げられた。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00941.html

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材育成状況

<成果>

全国高校生フォーラムにおいて生徒投票賞を受賞した。

このフォーラムにおける表彰は初年度より4回連続となる。

<資質・能力>

本年度は、連携校も含め、活躍した生徒4グループとその周囲にインタビューを行い、動画資料を残した。その取り組みで、他者に共感する力・人を巻き込む力・コミュニケーション力・多様性を認め尊重する力・常識を疑う力・やりきる力・振り返る力・自分の現状を認識する力・課題を発見する力・一歩踏み出す力・周りに影響を与える力の実例を示すことができた。

<心構え・考え方・価値観等>

連携校・連携団体・機関とのオンラインの取り組みが充実した。オンライン海外研修・国際会議や全国高校生SRサミットにおいて、全国の高校生、社会人や国際学生など多様な他者との協働により、様々な価値観や考え方に触れ、プロジェクト案をまとめるなどした。

<探究スキル等>

IGコースのコア探究が完成念を迎え、学校全体に探究の概念が広がった。校内実施のマイプロジェクト in 宇治における発表の質は、昨年より大幅に上がってきた。連携校でも、全国高校生SRサミットやオンライン海外研修を通して、探究のスキルがあがっていることが、前述のビデオ作製により明らかになった。

b. ALネットワークの果たした役割

オンラインが中心になったが、オンラインの特性を活かし、昨年以上に各連携校・連携団体との間で情報交換が行われた。オンラインの取り組みも、その特性を活かし、今まで以上の取り組みができた。別冊の**研究報告書第6章**に各連携機関からの報告を掲載した。それらから要点を抜粋する。

・SRサミットでは、グループの中でもリーダーシップを発揮し、様々なオンラインツールを

用いたスケジュール管理を行い、グループ活動の円滑な運営にコミットし続けた。

- ・今回のオンラインツアーに参加した4名の生徒たちは、「どうして英語を学ぶのか」について、まさに実体験を通して気が付くことができた。
- ・SR サミットに参加したことで、目標に向かって進んでいく素地を身に着けた。
- ・APU Two-Day Summer Camp での学びを大学でも続けたい、また大学での学びの中で多様な価値観に触れ自分を高めたいという強い想いから、立命館アジア太平洋大学に進学した。
- ・SR サミットを通して、良いプロジェクトにする為には自分達のことだけでなく、相手のニーズに沿うものにする必要があることを再確認した。
- ・模擬国連 (MUN) に参加したことで生徒の資質やマインドに大きな変容が見られ、経験者である生徒達が、独自に勉強会を開くなど、主体的に協働する姿を見ることができた。
- ・WWL「で」生徒も大人も、確かな「連携」ができていたと強く感じます。
- ・「フィリピンの現実を知った今、知っただけで終わってはいけないと思うようになった。現実を知ったからには、その現状を変えていく責任のようなものがあると思う。問題解決のために自分にできることを実行していきたい。」という高校生の言葉が、印象に残った。
- ・様々なつながりを持って教育を作り上げていく取組は、これからの教育モデルである。

c. 設定した中期目標 (2021 年度末) への到達

事業計画書において設定の中期目標 (最終 2022 年度までの目標) と達成状況は以下の通り。

- ・年度当初より IG(Integrated Global)コース 3 年で文理融合型カリキュラムを開始。⇒○達成
- ・コア探究Ⅲ, 文化探究, SDGsⅡ 等のカリキュラム開発開始。授業実践を行う。⇒○達成
- ・大学の正課研修, 正課に準ずる研修に参加できる仕組みを作る。⇒○APU と引き続き計画。
- ・AL ネットワーク構成について, 国内大学 3 校, 国内高校 15 校以上, 海外高校 6 校, 法人・NPO5 団体, グローバル企業 5 社をめざす。国内大学あと 1 校, 法人・NPO あと 1 団体⇒△ほぼ達成
- ・AL ネットワーク参加校から本校 SGH で進めてきたプロジェクトや研修への参加実績を作る。⇒○達成
- ・国際会議 (Global Youth Fair) 開催⇒△コロナ禍のために全国高校生 SR サミットとの合併開催となった。
- ・連携校参加のもと模擬国連を開催する。⇒○連携校参加のもと開催
- ・中短期留学生受入数 20 名, 短期交換プログラム・海外研修派遣 250 名, 受入 150 名 ⇒コロナ禍により未達成×

| 区分 | 名称 | 連携機関名 | 代表 |
|-----------------------------|---------------------------|---|----------------------------------|
| 事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等) | 当初 ① | 立命館大学 | 仲谷 善雄 |
| | 当初 ② | 立命館アジア太平洋大学 | 出口 治明 |
| | 元 ③ | フィリピン Lyete Nomal University | JUDE A. DUARTE |
| | 当初 ④ | 株式会社内田洋行 | 大久保 昇 |
| | 当初 ⑤ | アイ・シー・ネット株式会社 | 吉田 顕児 |
| | 当初 ⑥ | 一般社団法人 GIFT | 飯野まどか |
| | 当初 ⑦ | NTTドコモ株式会社 法人ビジネス戦略部スマートライフサービス推進 | 前田部 山本 哲史 |
| | 当初 ⑧ | 株式会社公文教育研究会 | 池上 秀徳 |
| | 当初 ⑨ | 認定NPO法人アクセスー共生社会をめざす地球市民の会 | 新聞 結也 |
| | 元 ⑩ | タクトピア株式会社 | 長井 悠 |
| | 元 ⑪ | Learning in Context (協和物産株式会社) | 空田 真之 |
| | 元 ⑫ | インドネシア 西スマトラ州 Padang Panjang City | FADLY AMRAN |
| | 2 ⑬ | タイゲームズ株式会社 | 菊地 憲理子 |
| | 2 ⑭ | 株式会社Inspire High | 杉浦 太一 |
| | 2 ⑮ | CURIO Japan 株式会社 | 今西 由加 |
| 2 ⑯ | 株式会社アジックス | 廣田 康人 | |
| 2 ⑰ | 米国ハワイ州観光局 | ミツユ・ヴァーレイ | |
| 事業連携校 (国内外の高等学校) | 当初 ① | 台湾 中山大学附属国光高級中学 (国立) | 陳 修平 (新) |
| | 当初 ② | タイ KASETSART UNIVERSITY LABORATORY SCHOOL (国立) | Sasitorn Jaingakorn |
| | 元 ③ | Philippine Science High School System (国立) | Lilia T. Habacon |
| | 元 ④ | マレーシア Sekolah Menengah Kebangsaan (Penerapan) Sri Aman (公立) | MISLIAH BT. KULOP |
| | 元 ⑤ | メキシコ メキシコ学院メキシココース (私立) | Adriana Mercedes Rangel Alvarado |
| | 2 ⑥ | 高崎市私立三信高級家事商業職業学校 (私立) | 林 寿 |
| | 元 ⑦ | インドネシア・香港・シンガポール検討中 () | () |
| | 当初 ⑧ | 学校法人市川学園市川高等学校 (私立) | 宮崎 豊 |
| | 当初 ⑨ | 学校法人聖マリア学園聖光学院高等学校 (私立) | 工藤 誠一 |
| | 当初 ⑩ | 学校法人瑞鳴学園青翔閣高等学校 (私立) | 横井 可朗 |
| | 当初 ⑪ | 学校法人福岡聖学院福岡聖学院高等学校 (私立) | 西山 和幸 |
| | 当初 ⑫ | 学校法人東明学園東明館高等学校 (私立) | 荒井 優 |
| | 当初 ⑬ | 学校法人立命館立命館高等学校 (私立) | 東谷 保裕 |
| | 当初 ⑭ | 学校法人立命館立命館慶祥高等学校 (私立) | 江川 純一 |
| | 当初 ⑮ | 学校法人立命館立命館守山高高等学校 (私立) | 寺田 佳司 |
| 元 ⑯ | 愛媛県立三崎高等学校 (公立) | 若江 亨 | |
| 元 ⑰ | 宮崎県立宮崎大宮高等学校 (公立) | 飯干 賢 | |
| 元 ⑱ | 宮崎県立飯野高等学校 (公立) | 押方 修 | |
| 元 ⑲ | 長崎県立長崎東高等学校 (公立) | 野田 定延 | |
| 元 ⑳ | 学校法人名城大学名城大学附属高等学校 (私立) | 伊藤 憲人 | |
| 元 ㉑ | 国立明石工業高等専門学校 (国立) | 笠井 秀明 | |
| 元 ㉒ | () | () | |

9 次年度以降の題及び改善点

<運営指導委員会・検証委員会>

昨年の意見をもとに、ビデオ活用などが進んだ。生徒の変容記録、プロセスや生徒のラーニングヒストリーを示すことで、伸びた生徒と伸びなかった生徒の比較が明確になるという意見から、ラーニングヒストリーを残す取り組みを行った。

本年度は、2 回の運営指導委員会、2 回の検証委員会のほか、個別各委員にアセスメントについての意見を伺うなどしてきた。それらの中での代表的な意見について以下に記す。

- ・課題研究の取り組みと進路のつながりが出てきている。
- ・学びを止めない、オンラインの活発な利用を感心。人に語ることでまとめることができ、そ

れによって Keep Track できると感じた。明らかに、高校に大きな転換があったと思う。

- ・教員にとってのコアの重要性（カリマネに気づく教員多数）。
- ・セレンディビティ，アクシデンタルな学び，偶然性をいかに多く引き起こせるかが深い学びにつながる。
- ・文化の違いからくるコンフリクトを乗り越え，何かを作り上げるという体験を通して，真の楽しさと次への活力が作られるような実践を評価。悔しさが成長を助けることもある。
- ・日本の幸福度が低いというデータがあるが，西洋的な幸福の基準で幸福を測るからであり，寄付をしたから幸福になるという考えを押し付けることになる。
- ・援助も同様で，援助する側と援助される側に上下関係を見る場合が多い。助けるつもりで行ったら，逆に助けられる経験をしたということや，10年後には途上国と状態が逆転することがあるなども想定・理解していく必要がある。

<管理機関>

拠点校とともに，AL ネットワーク構築ならびに運営を良好に進めることができている。次年度以降もこの体制の継続・強化が After Colona の新しい学びを創出する上で重要である。

<AL ネットワーク>

AL ネットワーク事業連携学校，連携機関・団体どうし，互いの情報を共有し，協働することで相乗効果を生み出している。全国高校生 SR サミットを中心に周囲を巻き込む大きな渦となった。これらがさらに全国的に定着できる仕組みづくりを提案していきたい。

<研究開発にかかわる課題と改善点>

今後の新型コロナウイルスの問題により，スケジュール変更を余儀なくされている。一方で，オンのメリット，デメリットが明確になり，その特性を活かしたオフラインとのハイブリッド型の開発を行う。コロナ禍の継続によってオフライン実施の難しいものについては，さらにオンライン実施の高度化を行う。

<オンラインの特性>

生徒の学びを止めないオンラインの取組が行われ，それによりその特性がわかってきた。

主なメリット ①現地に行く必要がなく，移動時間や移動費用が不要のため参加しやすい⇒
・参加者の数を増やせる・多様な参加者を募れる・頻度を増やせる。②講師も，講演場所まで来る必要がなく，スケジュールを組みやすい⇒今までなら実現しにくかった講演を聞くことができる。③短時間なら，画面に集中して気が散ることが少ない。④リアルでは訪れることができない危険な場所も体験できる。⑤別のツールを組み合わせ活用しやすい（全員スマホかPCの前）。⑥事故や病気のリスクがなく引率負担が減る

主なデメリット ①長時間の研修や会議は，かなり疲れる⇒・受講側は長時間の集中が難しい。②現地のネット環境や時差に影響される。③現場の空気感などを感じる事が難しい⇒
・全体が見えにくい・相手の反応がわかりにくい・休み時間や食事時間の会話を持てない④双方向でのやり取りには限界がある⇒・身振りや熱量，参加者全員の反応などが伝わりにくい・参加者同士の対面交流がないため，意見交換が難しい・何気ない会話から理解が深まる機会を持てない・一度でも現地を訪れ相手がわかっている場合に比べインタビューに深みが出ない。⑤気軽に参加できるが，研修に終日拘束されていないため欠席や遅刻が起りやすい。⑥視聴者になりやすく参加している意識が低くなる

主なデメリットを軽減，メリットを活かす取り組みがなされてきたが，次年度はさらにそれらを明確にし，よりよい取り組みを構築する。

Web 公開資料：研究報告書，コア探究実施報告書，第2回 WWL 研究報告会資料集，生徒の成長にかかわる動画等

【担当者】

| | | | |
|-----|------------|--------|----------------------------|
| 担当課 | 一貫教育部一貫教育課 | TEL | 075-813-8218 |
| 氏名 | 竹中 宏文 | FAX | 075-813-8219 |
| 職名 | 部付部長 | E-mail | takechu@fc.ritsumeai.ac.jp |